

後京極殿御自歌合の批判

辻 森 秀 英

「群書類從」⁽¹⁾第八輯に「後京極殿御自歌合」という藤原良經の自作の歌合が輯められている。俗書の多い中世時代であつて見れば批判なしには信賴することができないが、果して信ずるに足るものであるかどうか。これが第一の問題である。⁽²⁾奥書は次のようである。

三品禪門者。當世之貴老。我道之師匠也。仍爲_レ蒙_二其芳命_一。以_二愚詠_一所_二結卷_一也。素隔_二柿本之塵_一。定類_二梧臺之石_一。努莫_レ及_二外見_一。

千時建久九年仲夏二日

この詞書の後には俊成の歌と、良經の作と目される歌がある。この歌合には判がついているが、「依仰_二乍恐付之_一」という釋阿の詞書から見ると、俊成が良經の請によつて判を加えたのである。三品禪門は勿論俊成であるから、良經は俊成の直門である。良經の師は定家であるという⁽³⁾説も一部には見えるがこれで見ると俊成で、⁽⁴⁾定家とは相弟子である。⁽⁵⁾俊成は清輔が治承元年に卒し

た翌年から良經の父兼實の邸に出入りするようになった。これは和歌の顧問としてである。定家が兼實邸の家司になつたのも恐らくこうした事情からであらう。して見れば良經が俊成の指導を受けることは當然のことである。治承二年は良經十歳である。

詞書の愚詠を以て巻を結ぶというのは俊成の歌に答えた歌をさすので良經自身の言葉であり、「釋阿生年八十五」とある歳も間違なく、奥書には何らの不合理もない。そして、定家が貞和五年に書寫したというのである。

註1 經濟雜誌社版、卷二百十九

2 詞書の後の部分を次に舉げる。

結びおくことは露のいかなれはさのみは玉の聲ゆらくらは
依仰_二乍恐付之_一 老比丘釋阿生年八十五玉ならぬことはも
君にかかれてとまらん代々の光とそなる

凡歌合判詞。自天德始。干今不絶。然而上古末代不可有比類哉。

貞和五年七月十二日。於今小路宿書寫之。

五條禪門各判之詞書加。 定家

俊成は良經の歌が立派であることを云い、良經はそれに對して俊成の指導によつて良くなつたのだとの感謝の意をいつていたのであつて、師に對するいい方である。

3 國歌大系、山岸徳平氏「秋篠月清集」解説

4 定家は良經より七歳年長であるが、師となるには年齢的にも不合理のように思われる。

「豫值遇彼御所（大炊殿、兼實邸）」（名月記、正治元年九月十二日）正治元年は定家三十八歳であるから家司になつたのは二十四歳であらう。（風巻氏）

5 兼實が俊成を召出して和歌の師としたことは「玉葉」に屢々記されている。治承二年二月廿六日―前馬權頭隆信來申云、俊成入道内々申云、和歌事殊有御沙汰之由奉之。同廿七日―未刻隆信來示俊成入道返事云、如此蒙仰此道「之」面目、何事遇斯哉、更非申限。六月廿三日―五條三位入道俊成傳名來、於和歌之道、爲長者、仍前馬權頭隆信朝臣、先令音信、今夜始所來也、數剋交語、深更歸去了。九月卅日―先日密々歌合、遣俊成入道之許、令付勝負今朝送之。等々がある。

二

良經は建久六年、二十七歳で正二位内大臣になり左大將を兼ねた。これは文治三年に薨じた長兄の内大臣良通の後をおそつた形になつた。ところが、建久七年に父の眞實が失脚して關白を罷めたので彼も謹慎せざるを得ない状態になつた。建久九年正月十九

日には兼任の左大將を罷められた。（補任）この歌合の奥書の建久九年仲夏は折からこの時期に當るのである。自らの憂悶を慰めるためにしたものだと考えられないこともない。彼の年齢は恰度三十歳である。

この歌合は百首歌合になつていて、總計二百首から成つてゐる。いまこれを家集「秋篠月清集」と照合して見ると、次のようになつていて、全部の歌が後の家集に入れられてゐることが分る。即ち

所 屬 成立年號 歌合中の歌數

花月百首	建久元年秋	一八
二夜百首	同 十二月	三
十題百首	建久二年冬	二一
歌合百首	建久四年秋	三四
治承題百首	建久九年以前	二五
南海漁夫百首	建久九年以前	三一
女御入内月次屏風	文治六年	六
五首歌合	不明	一
家集類題	各歌の年代、不明	六一

計 二〇〇

「治承題百首」と「南海漁夫百首」は制作年代が不明だが、家集排列から考えると建久四年の歌合百首に續くものと思われ、この歌合の制作年代を信すれば建久九年以前のものになり、恐らく建久四年以後の制作と思われる。類題から出た作品は全部年代不明で、家集の中でも何らの手掛りもなく、これらの歌はこの歌合

に入っているという理由で建久九年以前の作品と見たい。特に注意されるのは山「二夜百首」の三首だけのものである。家集中のこの百首の後書きによると、十二月十五日内裏で六十首、十九日に残り四十首を作つて百首にしたものでこの名を付したのである。こういう速詠であるから彼としても慎重な態度をとつたのである。決してこの百首の中に佳作がないという譯ではない。こうした心遣いから見ても、この歌合が自選されたものであると考えるのではないかと思う。

この歌合と家集との關係について、この二百首の全部が家集に入っているから、逆に家集から作品を選んだのではないかという疑を起せば起せるが、建久九年までの作品だけを取つて態々偽書を作るといふことも考えられず、俊成の判も信じてよいと思うから、良經が家集を編集する際にはこの歌合も重要な資料になり、従つてこの歌合の全作品が家集中の作品となつたのであらう。

大體、「秋篠月清集」の成立年代は元久元年十一月十日以後、同年同月廿六日までという際といふ設定をしなければならぬ事情にあるが、廿六日以後には降せない成立事情を持つこの歌集に見れば、十日に作られた作品が直ちに家集に入入れられる素早さを見るべきであるが、そうした際どいやり方を考えて見ても、良經は自身の作品を常に整理する凡帖面さを持つていたような感じがする。百首歌は問題外としても、類題歌は家集編集の大切な資料となつて全部の歌が入入れられたのである。

次に新古今集入集歌とこの歌合との關係はどうなつてゐるか。この歌合から出ている入集歌数は全部で二十三首である。分類

すると次のようになつてゐる。

〔春〕 みよしのは（治承）そらは猶（歌合）わするなよ（二夜）

よしの山（歌合）

治承題百首（一）二夜百首（一）歌合百首（二）計（四）

〔夏〕 うちしめり（家集・「五首の題のなかに」とあつて「春」の部に入れられ、新古今集では題知らずになつてゐる）

家集（一）

〔秋〕 物おもはで（歌合）暮かかる（南海漁夫）たぐへくる（十題）立田姫（歌合）歌合（二）十題（一）南海（一）計（四）

〔冬〕 枕にもそでにも（南海）消かへり（南海）石上ふる野の

（治承）

南海百首（二）治承題百首（一）計（三）

〔戀〕 もらすなよ（歌合）いく夜われ（歌合）いつもきく（歌合）思ひかね（歌合）歌合百首（四）

〔神祇〕 神風や（家集）

家集（一）

〔旅〕 むかしきく（家集）もろともに（南海）

家集（一）南海百首（一）計（二）

〔雜〕 ふる里は（十題）我ながら（南海）十題百首（一）南海百首（一）計（二）

〔哀傷〕 春かすみ（家集）

家集（一）

〔釋教〕 おく山に（十題）

十題百首（一）

總計 二三首

二三首の内譯

二夜百首 一 歌合百首 八

治承題百首 二 十題百首 三

南海漁夫 五 家集類題 四

建久九年以前の new 古今集入集歌で自歌合に入っていないのは次の三首だけである。

かさねても涼しかりけり夏衣うすき袂にやどる月影(歌合百首)

柞原筆も色やかはらむ森の下くさ秋ふけにけり(歌合百首)

又もこむ秋をたのむの雁だにも鳴きてぞ歸る春の曙(治承題百首)

これを良經の new 古今集入集作品から眺めて見ると、

自歌合時代の作品 二六(内、三首は歌合作品以外のもの)

自歌合以後の作品

院初度百首 一六

千五百番歌合 一〇

老若五十首 四

句題五十首 二

その他建久九年以後 一六

年代不明 三

計 三七

「その他建久九年以後」の作品の内譯

建仁三年の證あるもの 一

釋阿九十賀 建仁三年 一

建仁三年の歌合

和歌所歌合 建仁元年以後 一

院選歌合 建仁元年 一

京極殿初度御歌合 建仁三年 一

和歌所月十首歌合 建仁元年以後 一

水無瀬戀十五首歌合 建仁二年 三

春日社歌合 元久元年 一

計 一六

年代不明の三首を別にと七四首の中の二六首が自歌合時代の作品で、自歌合に入っている二三首の割合は、自歌合以後の作品の約二分の一、全體に對しては約三分の一に當る。すると、自歌合の作品は new 古今集入集作品に對して相當の重さをもっていることが分る。 new 古今集編集の資料としては、良經の全作品が使われたであろうが、建久九年以前の作品では、自歌合中の歌が大部分を占めているところから見ると、この自歌合が第一の資料として使われたことが考えられる。 new 古今集の撰者達がどのようにして歌を選んだかということは詳しいことは分らないが、目星しい作者から作品を提出させたという例もあるから、良經自身、これを資料として提出したかも知れない。いづれにしても、この自歌合が作者自身も他の者も重んじていたことは new 古今集入集作品の數によつて裏付けられると思う。この自歌合は、

一、 new 古今集に建久九年以前の歌の大多數を出している。

二、俊成の判を持つている。

三、「二夜百首」のような速詠の作品を避けている。

四、奥書に特別な矛盾がない。

五、家集との本文を比較すると、(4)多数の異文を持つている。

これは家集として纏めるときに作者が手を入れたと考えられ、後に家集から抜かれたものでないことを証明する。

以上のような理由から良經自身によつて作られたものと断定してよく、信賴すべきものと考ええる。

註1 建久元年十二月十五日月蝕、於内裏直廬詠之、亥一點始之、丑終詠六十首、同十九日戌終重始之、子尅終百首、篇符兩夜之外不詠之、雖一首不廻風情者也

2 教家本奥書に「此合點者、前大僧正、釋阿入道兩人之點也」故に元久元年十一月廿六日以前の成立と見なければならぬ。ところが、冬部に「春日社歌合」の歌がある。この歌合は元久元年十一月十日に行われた(大日本資料)故に元久元年十一月十日以後、同年同月二十六日までの成立と見ねばならない(松田武夫氏・秋篠月清集成立年代攷)一應はこの通りになるが、殆んど原形が出来上つてゐるところへ新しい作品を加えたのであらう。唯、俊成が死の間際に加點したことは偶然の幸である。明月記によると、十一月廿六日に兄の成家から廿五日に俊成が病氣で倒れたことを知らせて來たとあるから、廿五日には既に歌も見られない状態にあつたのである。既にこの頃は新古今集の編集が行われていたのであるから、良經は勅撰集編集を期として家集編集を行つていたのであらう。

3 入集歌の計算は、岩波文庫本、佐佐木博士校訂の「新古

今和歌集」に據つた。

4 次に異文の數例を擧げる。照合は國歌大系本の六家集本に據つた。

氷るし水のしら波(たち歸り)清瀧川に春かぜぞふく(「かつこの部分」「いは越えて」(家集)以下同じ)(治承題百首)

明わたる外山の梢はるはると霞そかほる(遠)の春風(「宇治」)

(花月百首)

足引の山かげなら(ぬ夕暮に)このは色づく日ぐらしのこゑ(「ず夕まぐれ」)(部類歌)

(たづねつる山路にきよは)更にけり杉の梢にありあけの月

(「たどりつる道に今宵は」)(歌合百首)

末までといひしばかりに淺茅はらや(いまも別も)朽や果なむ

(「宿も我が身も」)(歌合百首)

こうした個所は約五十に及んでゐる。

三

かくして、この自歌合は信用してよいと思うが、彼が自選したとなれば、この作品は彼の選歌眼や、彼の意圖するものを示すものとなつてくる。家集の作品と自選した作品を比較して見るとどんな結果がでるか。

先ず彼が選び残した作品を検討する。

窓の内に時々花のかをり來て庭の梢に風すさむなり

はるばると我が住む方は霞にて宿かる花を拂ふ山風
獨りぬる闌の板間に風ふれてさむしる照らす秋の夜の月

雲と見し深山の花は散りにけり吉野の瀧の末の白波(花月百首)
これらの歌は華麗で寫實的であり、柔かいながらさわやかな調べを持つ彼の特徴を示すものであるが、

明け渡る外山の梢はるばると霞ぞかをる遠の春風
獨り寝の夜寒になれる月見れば時しもあれや衣うつ聲

叢雲のしぐれつ過ぐる梢より嵐にはる山の端の月(花月百首)
の入選と似通つたところを持つている。「獨り寝」の歌などは前を捨ててこれを取つた意圖が分る。入選歌の方が調べが強い。

「明け渡る」の歌も「窓の内に」「はるばると」の歌と比較すると調子が高い。俊成の判はこの三首とも負になつていて、その勝の方は抒情性の強いものである。これは俊成の好みである。恐らく良經はその反對の傾向である。教家本では二、三は俊成の點が入つていて、一應よい歌と認めてはいる。この點も、隱岐本の例もあるので絶対に信頼を置くことは出来ないが、二番目は新勸撰が取つてゐる。先の四番目の歌を取らなかつたのはどうした理由か、この當時の流行の型である。山千五百番歌合で色經は使い古された言葉を非難した判をしているが、古い型が鼻についたのであろうか。

「二夜百首」が三首しか取られていないことは先にいつたが、決して悪い歌ばかりではない。

軒ちかき梅の梢に風すぎて匂ひにさむる春の夜の夢
此の頃は梅をばおのが匂ひにて通ひてくるき春の山風
のような優婉な作品、

音つれし木の葉散りぬるはては又霧の籬を拂ふ山風

山賤の谷のすみかに日は暮れて雲の底より衣うつなり
秋の夜はをのの條原風さえて月影わたるさを鹿の聲

のような描寫力を見せた作品もある。これらも彼の詞書のように風情なしと見たのであろうか。随分描寫力に優つた作家であるが外面的な描寫を好まなかつたとするならば、賞讃に價することである。戀の部で、

曉の風に別るる横雲をおき行く袖のたぐひとぞ見る
を取つて、

知るや君末の松山こす波になはも越えたる袖の氣色を
を取らなかつたのはどうした理由であるか。教家本では前の歌は俊成は點を入れているが、歌合では負にしている。この歌は固定家の有名な歌に及ぶべくもないし、智的な情熱のない歌である。それに比して後の歌は典據を持つているが、情熱的で前の歌には優つてゐる。風情を求めるあまりの失策かと思われるが、彼の意圖するものが窺われる。

古郷は風のすみかとなりけり人やは拂ふ庭の萩原
月情みしぐれぬ夜はの寢覺にも窓うつものは庭の松風(十題百首)

も取つて恥づかしくない歌である。ところが、

四方の山くもしく峯に跡とちて憂世を聞かぬ風の音かな
足柄の關路こえ行くしののめに一むら霞む浮島が原(十題百首)
前の歌を取らないで後の歌を取つてゐるのは流石に良經だと思われる。前の歌は説明的であるが、むしろ俊成的である。後の歌は叙景である。これで彼の心がつきり分るように思えるが、この

歌は然し單なる叙景である。

「歌合百首」中の新古今集入集歌

かさねても涼しかりけり夏衣うすき袂にやどる月影(夏)

柞原雫も色やかはるらむ森の下くさ秋ふけにけり(秋)

「治承題百首」の

又もこむ秋をたのむの雁だにも鳴きてぞ歸る春の曙(戀)

などが取られなかつたのは一つの問題を投げかける。教家本では第一の歌は俊成も慈圓も點を入れているが、他の歌にはない。良經の心を推量するのは困難であるが、調べが柔らかく抒情的であることは事實である。第一の歌については③「古風と新風との間に立つた作」第二の歌は「全體が華麗で暗示的なところは正にこの當時の風である」第三の歌は「心が自然に繋がり續がつて區別のないものとならうとしている。これは余情といふ中でも最も重んじられた余情である」と窪田空穂先生は評されているが、第二第三は當時の風に從つた余情の歌である。余情を好まなかつたと見ることは出來ず、理由を他に求めなければならぬ。ただ余情萬能主義ではなかつたことは注意すべきであるが、とすれば、弱い調べが満足できなかつたと推量される。叙景を志していた彼としてはあるいは當然のことであつたかもしれない。特に「治承題百首」には五首の後朝戀がある中で、「今はとて涙の海に楫をたえ沖をわづらふ今朝の舟人」だけを取つている。これは明瞭に比喻で輪廓がはつきりしている。彼が純粹抒情を重しとしなかつたことがはつきりするようである。

「歌合百首」から出た戀の歌

吉野川早き流れをせく岸のつれなき中に身を碎くらむ(寄川戀)
枕にももとにも霧の玉ちりて獨り起き居るさ夜の中山(旅戀)
與謝の海の沖つ潮風浦に吹けまつなりけむと人に聞かせむ(寄
關戀)

これらに比して、

忘れずよほのぼの人を三島江の黄昏なりし葦の迷ひに(見戀)
月やそれはの見し人の面影を忍びかへせば有明の空(曉戀)
袖の上になるるも人の形見かは我と宿せる秋の夜の月(寄月戀)
などは劣つてゐるであらうか。入選の歌はこれらに比して情趣がなく感情が乾いてしまつてゐる。取らなかつた歌は多少難解なところがある。若しこれが理由であつたとするならば彼は定家と反對の立場にあつたといひ得るであらう。然しこれは斷定をさし控えたい。

春の色は花ともいはじ霞よりこぼれて匂ふ鶯のこゑ
今はとて山とび越ゆる雁がねの涙露けき花の上かな
初瀬山をのへの鐘のあけがたに花より白む横雲の空(南海漁夫
百首)

これらの歌は叙景を基本にした感覺的なものでこの時代の新しい傾向といえるであらう。第一の歌は教家本で俊成が點を入れたものであり、後に風雅集に取られた。これを取らないで、

春は唯おぼる月夜と見るべきを雪に隈なき越の白山
春やいま相坂こえて歸るらむ木綿附鳥の一こゑぞする
という平凡な歌を取つてゐる。これは新しい歌に自信がなく平凡なものを取つたと見られるであらうか。寫實的作品に注意すべき

ことがある。

雨はるる軒の雫に影見えて菖蒲にすがる夏の夜の月
故郷の庭のさゆりば玉ちりて螢とびかふ夏の夕ぐれ
柞原しぐれぬ程の秋なれや夕露涼し日ぐらしのこゑ
松に吹くみ山の嵐いかならむ竹うちそよぐ窓の夕暮（南海漁夫
百首）

これらの寫實的作品が取られないで、

山の端も霞の衣なれなれて一夜の風に立ちわかるなり
はるかなる常世離れて啼く鴈の雲の衣に秋風ぞ吹く

が取られているが、ここでは美的空想が重んじられていることになり、寫實だけでは満足出来なかつたことが感じられる。「松に吹く」の歌は教家本では俊成、慈圓共に點を入れているが、調べに透徹したものがない。

註1 千五百番歌合卷七、良經判

五三八番 右負 忠良

夕暮のあはれを空にながむれば秋きにけりと萩のうは風

情憶近年秋夕詠 此詞度々幾回看

2 春の夜の夢の浮橋とだえして峰に別るる横雲の空

3 「薄き袂に宿る月影」は清らかにも艶でもあつて正にこ

の當時の風である。しかし、これに添へた「かさねても涼し
かりけり」といふ理智的説明は古今集風のものである。（窪

田空穂先生著「新古今和歌集評釋上」）

紅葉といふことは少しもいはずにいる。その扱ひ方、表現
共に婉曲を極めてゐる。この婉曲は暗示的にする爲である。

（同。）

詞の余情が多い。「だに」の一語で戀の心を主としたもので
あることを暗示している。「又も來む」といふので我はいつ
又逢へるか當てもない身だといふことを暗示している。更に
心としての余情も多い。（同下）

四

良經の選歌で特に強く感じられるのは「二夜百首」にいう「風
情」である。これは感味という言葉に當るであらう。この時代の
六家の中では彼は最も寫實的な歌人である。ところが彼はそれを
餘り重んじていない。現實の對象に喰ひ入るような描寫はこの當
時の歌人が意圖するところではなかつた。それが彼にも明瞭に現わ
れている。描寫をしてもそれを通じて感覺的な美意識を求めるに
過ぎなかつた。良經個人においてもそうだが歌壇全體もそうでは
なかつたか。彼の作品の

亂れ声の穗向の風の片よりに秋をぞ見する眞野の浦風（院初度
百首）

蛸の啼く音に風を吹きそへて夕日涼しき岡のへの松（院第二度
百首）

山遠き門田のすゑは霧はれて穗波に沈む有明の月（歌合百首）
などは最も寫實的作品であるが、新古今集には取られなかつた。

新古今集にも複雑な描寫をした歌が相當取られているが、それら
は皆な山華麗であるか、あはれの要素の強いものである。定家の
ような思想的な作家も時には全く描寫の歌を作っているが、良經

は特に目立つ歌人である。風情ということとは古今集以来の氣分で傳統の力はやはり強かつた。對象に捉えられないで感情を主にすることは短歌の本質としては本道である。彼の選歌にはこの感情を重んじている點が見られる。それは調べである。描寫という點から見ては巧みだと思われる歌でも彼は棄てている。抒情的な俊成の指導を受けた門下である彼にはこれは當然な筋道であらう。

この歌合は勿論選び残されたものも多いが、彼の前期の秀歌の殆んどを網羅しているといつてよい。いまはそれに言い及んでいゝ餘裕がない。師の俊成が彼の歌をどう見ているかを一言したい。

俊成が負にしている歌が二首新古今集に入っている。

よしの山花のふるさと跡たえてむなしき枝に春風ぞふく（歌合百首）負一十六番

高砂の尾上の花にはるくれて残りし松のまがひゆくかな（花月百首）勝

「歌合百首」では負の方の歌は持で、教家本では俊成、慈圓共に點を入れていて、一應よい歌と認めている。「まがひ」は家集では「榮え」になつてゐる。「まがひ」では實際意味が不明瞭であるが俊成はそれをよいとしている。それかといつて「榮え」では智的になりすぎる。俊成はそれに意味の深さを見たのであらうか。負の方は優雅な甘美な歌ではある。そして派手な歌である。新古今集時代としては負の方を取つたのは當然であらう。派手で、印象的であるからである。時代的なずれが感じられる。物思はでかかる露やは袖におく詠めてけりな秋の夕暮（歌合百

首）負一二十六番

何ゆへと思ひもわかぬ秋かなむなしき空の秋の夕くれ（家業類題）勝

これに對して俊成は「かかる露やは」は心姿がよいが、「むなしき空の秋の夕くれ」が心つくしがたいといつてゐる。負の歌は深い反省と感動がある。勝の歌はそこはかとなき淋しさがある。これは俊成の好みがいいたすところであらう。

いつも聞くものとや人の思ふらむこぬ夕暮の松風の聲（歌合百首）持

これは「歌合百首」では負でここでは持で俊成でがあまり感心しない歌であらう。教家本では俊成慈、圓共に點を入れてゐる。

俊成の心を封度すると心の深さがなかったものであらうか。

俊成は心の深さを求めたので、描寫だけの歌は負にしているのがいくつある。新古今集の歌もその例であり、前に觸れた「花月百首」の三首もそれである。自歌合七番の

九重の花の盛になりぬれば雲ぞくものしるしなりける（花月百首）勝

久かたの雲井にみえし伊駒山春はかすみの麓なりけり（十題百首）負

俊成の判によれば九重の花だから山の櫻は及ばないといつてゐる。判定のしようがないところいう常識論が當時の判に出てくる。素材ということから判定が出ることもあり得るが、この場合は俊成の判はおかしい。というよりも彼は優雅を求めるあまりに説明をいとわないところがある。こもそうである。感味からい

えば逆だと思われる。ところが、定家がこの負歌を新勅撰集に取っている。これはやはり俊成と新古今集の撰者の間にある時代の隔りを現わしていると思う。又定家はやはり負歌の

むかしたれかかる櫻の花をうへてよしのを春の山となしけむ

(花月百首)

を新勅撰集に取っている。

五

俊成は單なる叙景の歌を重んじていない。これは當然考えられることであるし、事實、判にも現われている。良經は叙景の歌を多く作っているし、歌の基調を描寫に置いているが、それを第一としないことはこの自歌合から十分讀み取れると思う。彼は描寫の歌を作りながらそこに徹することができない、それに自信を持つことができない。俊成の歌は弟子達によつて變化させられた。

變化させたものは俊成からいえば新しいものである。それは恐らく時代の要求であろう。自ら創作しながら自信を持ち得ずに良經はそれを次の時代に送つてしまつた。

註1 新古今集の華麗さは後鳥羽院自身が晩年には厭氣がさされた。隱岐本では後自身の「逢坂山」の歌や「嵐もしろき春の曙」のような一連の歌を除いておられる。この除去歌は小島吉雄氏によれば最も確實なものである。良經は自歌合の時代には、まだ十分自信がなかつたようだ。恐らく流行しはじめた頃であつたのだろう。良經は流れの上に浮んだ一人であつた。

2 俊成の判詞は「春は霞のふもとなるらん、面影ありておかしく侍れど、猶九重の雲のしるしはなべての山の櫻、およびがたくやと覺え侍れば、又左勝べくや侍らむ」(自歌合・七番)